

**発達心理学概論[特論] 第10講**  
**英語活動の導入の是非をめぐって**

**自己の内面を耕す  
ことばの教育**  
**～小学校英語教育を考える～**

**内田 伸子**  
**(お茶の水女子大学)**  
**[uchida.nobuko@ocha.ac.jp](mailto:uchida.nobuko@ocha.ac.jp)**

# 2010年 新学習指導要領 「英語活動」 小学校5年～導入

Q1. あなたは**是**? それとも**非**?

Q2. **是**または**非**と判断する理由は  
何ですか?

# 「非」の根拠—7つの論点

1. 言語獲得の**臨界期仮説**は支持できない。
2. **統語規則**の習得には「**敏感期**」が想定できる。
3. **音韻規則**の習得にも「**敏感期**」が想定できる。
4. 敏感期仮説に替わる「**Less is More仮説**」
5. 言語習得に及ぼす**学校文化**の影響
6. 言語聴覚の**臨界期**の克服—**音楽聴覚**の転用
7. **二言語相互依存説**—**母語**の土台をしっかりと築く



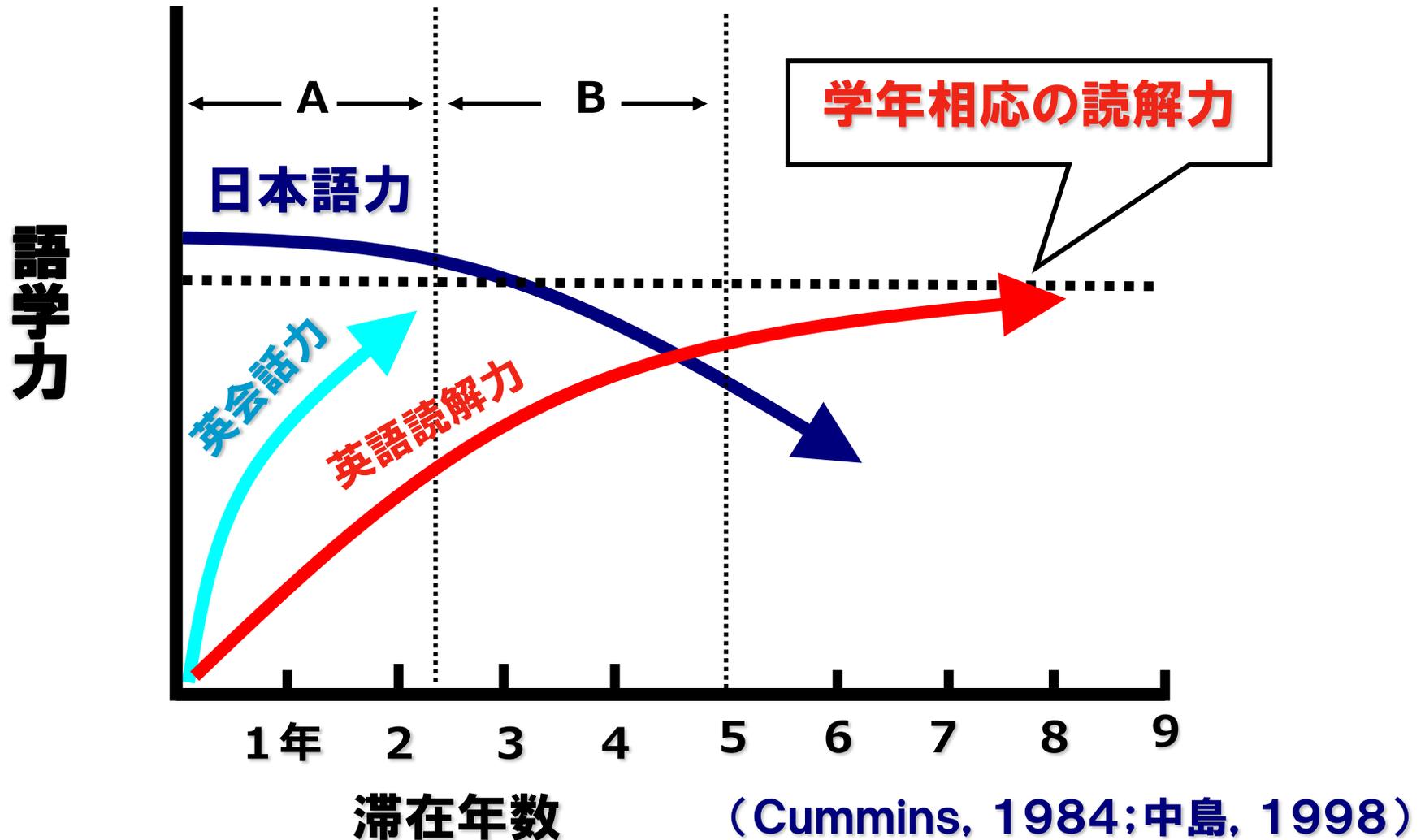
「ことばの学習のカリキュラム」

# 「私はバイリンガルになれなかった」

私は3歳11ヶ月から15歳まで11年半の間、旧西ドイツのハンブルグ市ですごしたいわゆる帰国子女です。滞在中、言語習得に関しては“自然放置”の状態におかれ、週5日の現地の学校と週1日の日本語補習校という生活を送りましたが、**とうとう1度もドイツ語を自由に使えたことはなく**、高学年になるほどにその不自由さは増しました。おしまいにはかなり参ってしまい、帰国することになった時にほっとして逃げ帰るという気持ちでした。今度「言語獲得の臨界期」という理論を知って、振り返ってみると、**その都度小さな“臨界期”があったのではないか、そして私はそれをクリアし損なったのではないだろうか**という考えが生まれたのです。

K.Y. 心理4年(内田, 1999)

# 滞在年数と2言語の力の推移



# 英語学習は早いほどよい？

I. 小学校での英語教育の問題点を**根源的な形**であぶり出す.

II. それに対する**代案**をさぐる.



(1) 学校英語教育のあるべき姿

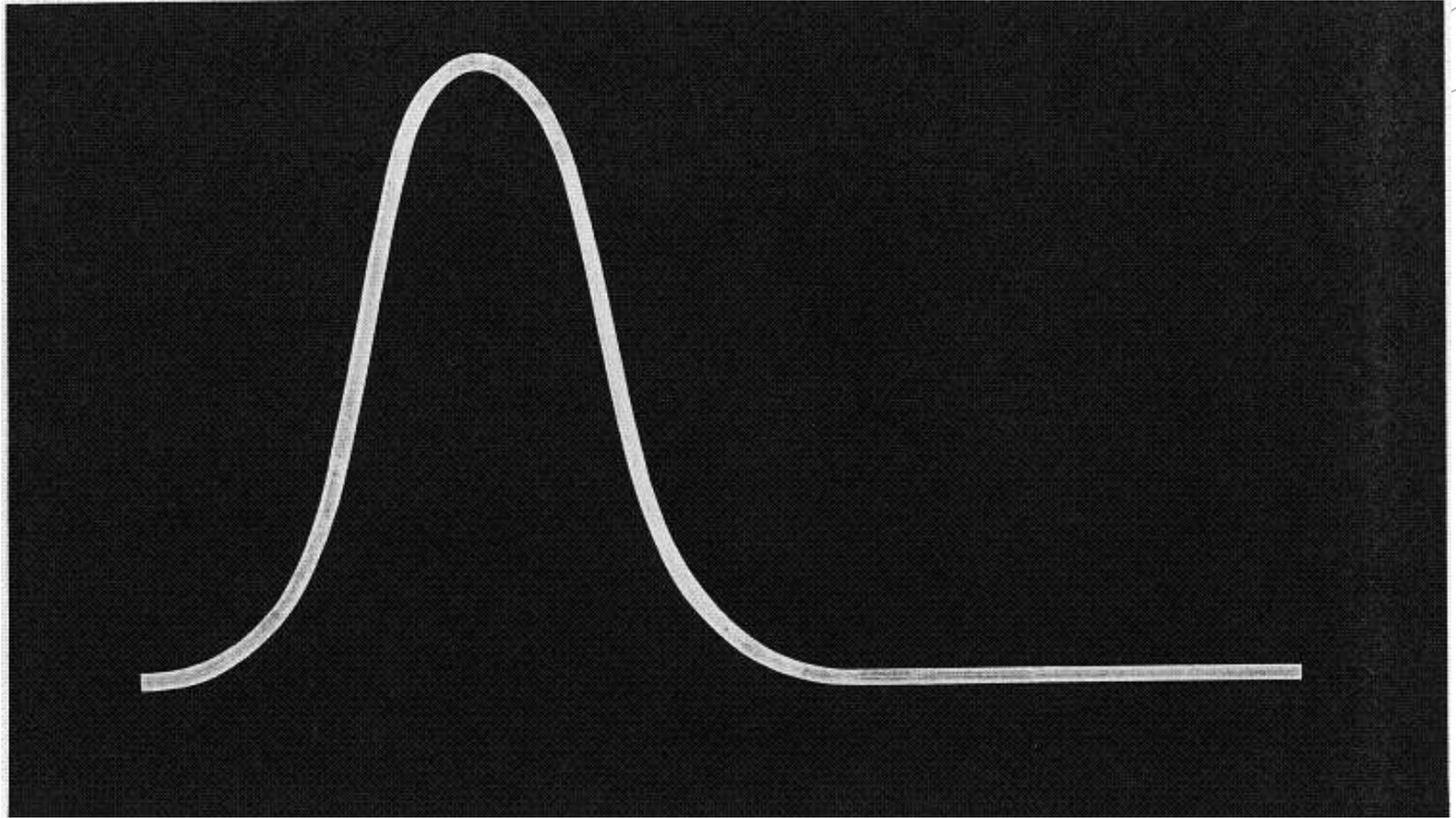
(2) 「言語教育」のカリキュラムや教材の開発

(3) 教員養成・研修プログラムの開発

# 言語獲得の臨界期(現象)



言語獲得能力

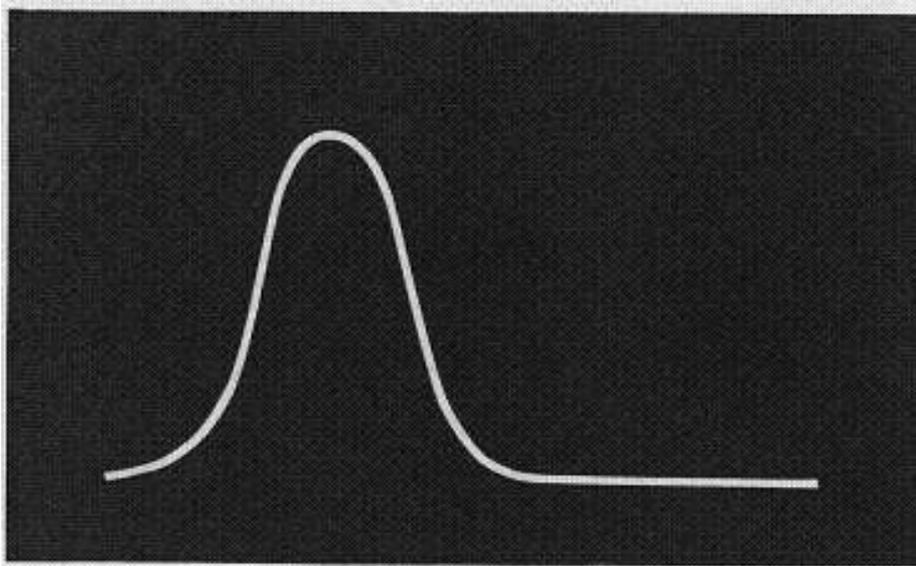


年齢

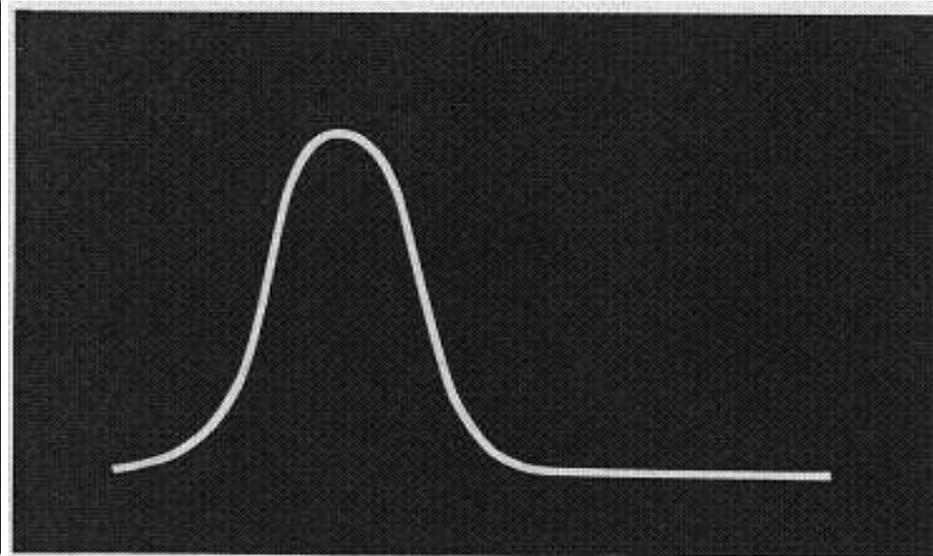
Newport, 1991

# 背後のメカニズムは？ **臨界期仮説**

- I. 脳機能の局在化:(Lenneberg, 1967)[**論点1**]  
言語固有の生得的な生物学的基盤(脳機能)があつて、一定の成熟期間を過ぎると言語習得能力は減衰する。



年齢(現象)

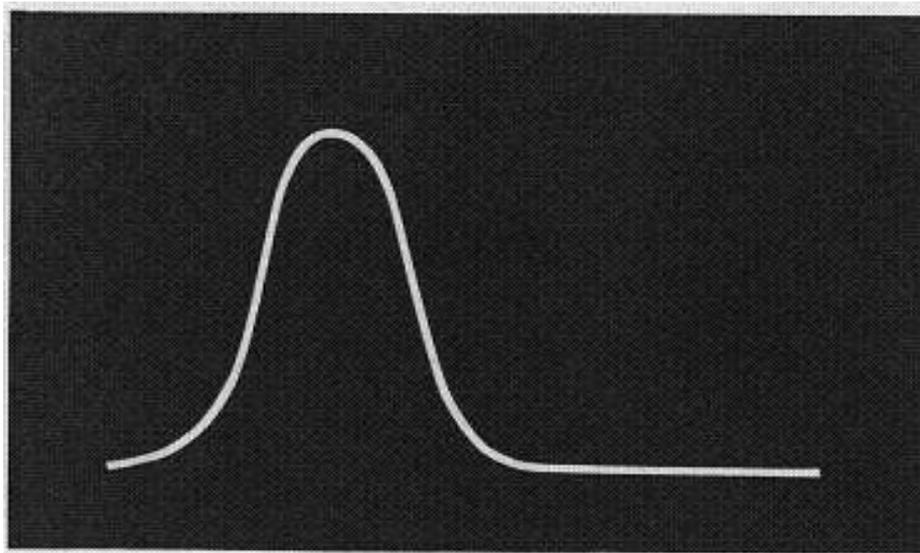


年齢(メカニズム)

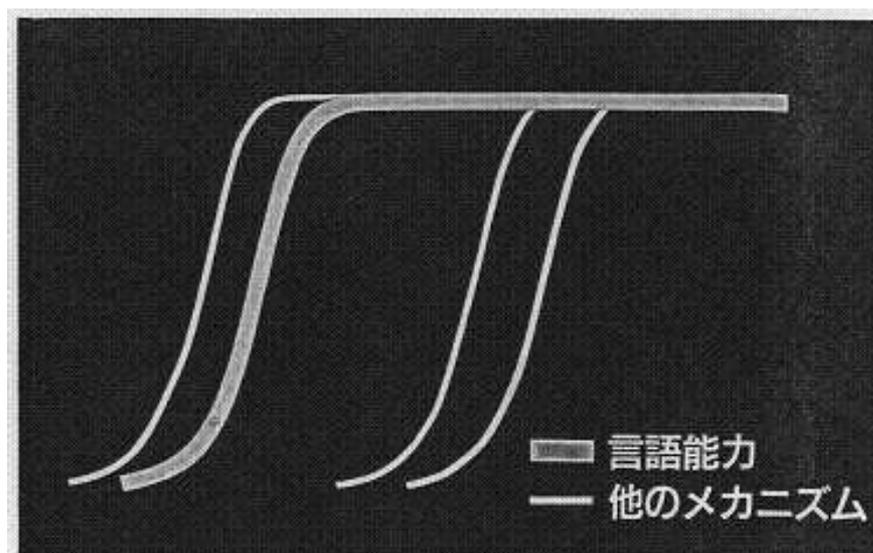
# 背後のメカニズムは？ **Less is More** 仮説

## II. 情報処理容量;(Newport, 1990) [論点4]

言語獲得能力は、言語獲得に関連した能力(情報処理能力)が成熟するに伴いかえって減衰してしまう。(入力が少ないと解析のための計算コストが少なくてすむ。) *e.g., morphology*



年齢(現象)



年齢(メカニズム)

伊藤 ゆかり

主婦(愛知県在住)



# 論壇

先月下旬の論壇に掲載された藤田道雄氏の「小学校の英語教育は一年生から」に賛論を送りたい。

要約の英語教育の利点は主に二つある。第一は英語期にさしかかる年齢で始めるよりも、発音や発音矯正が楽に英語に入っていくこと。第二は藤田氏が指摘されるように、低年生であればあるほど、「カカカタ化」せずに音

オピニオン © opinion

## 伊藤ゆかりさん(通訳者)

**発音**は確かに早いほどよい。しかし、早く学習することの利点はそれだけ。

★問題は.....英語母語話者並みに発音できることではなく、**英語で相手に伝えたいことがあるかどうか**だ。

### 例 マンデラ首相の演説

日本語力の低下と学力の低下、**そもそも考える力の低下**にどう対応するか。

2000年8月8日  
朝日新聞「論壇」

## 小学一年生からの英語は不要

その主旨としておられるため、英語を英語を母語とするネイティブスピーカーに近い発音で話せること。しかし、発音矯正は、ネイティブ以上の訓練が必要。さらに第一の利点であるとしても、私は否の立場が、それくらい重要な理由はない。まず発音をネイティブのようにするのではなく、話せるようになることだ。

受けて、子供の母語を身につける傾向があり、BとL、VとBの区別は不明瞭だ。しかし、それでもコミュニケーションは成立する。なかには海外留学の経験から英語に堪能な人たちが、職務的にものを要するのは、人間性と仕事の能力であって、いかに英語を流暢に話せるかどうかではない。語学力

に對する抵抗感も強くなり、メディアで使われている英語の比率が制限されていると認識する。逆にアメリカ人はフランスへの憧れが強い。それはフランスという国が国際的文化を持ち、それらを持ちしているからである。かりに英語が母語でも、同時に得られる文化や歴史がなければ元も子もない。それらについて得られる知識が必要だ。大切なのは発音ではなく、話す中身なのである。

義務があるのか。一九九九年の上野四郎間、私は通訳の仕事を通じてシンガポール、マレーシア、フィリピン、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカの合計七カ国の人々を

のケルソン・マンデラ前大統領を始め、各国のリーダーも彼女と前記のある英語の世界に接してきたが、その発音に驚かす者はいない。なほさらばの瞬間が素晴らしいからである。

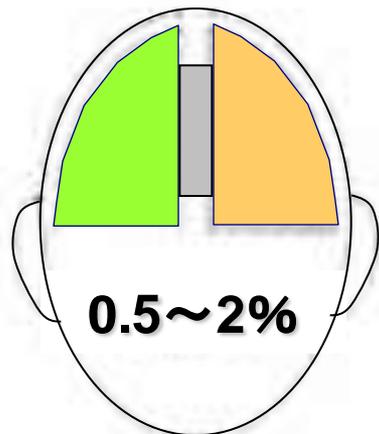
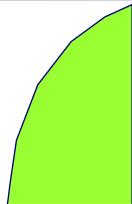
第二に小学校での学校教員が言われて久しい。ここからの首相のように歴史的な価値に接するつもりはないが、道徳や生活習慣と、子供達の振舞が得られている。発音矯正を強要しないために、こういった問題に取り組みの必要だ。

ネイティブ以外の人は皆、それぞれの母語の特徴をひきずった発音をする。私の場合は母語である日本語の影響を

また最近、英語の読み書きよりも発音の重視がある。日本国内で英語を話す機会のある日本人がどれほど、

第三に私も含めて、今の日本人は母国のことすら知らない。例えばフランスは英語

**左半球**



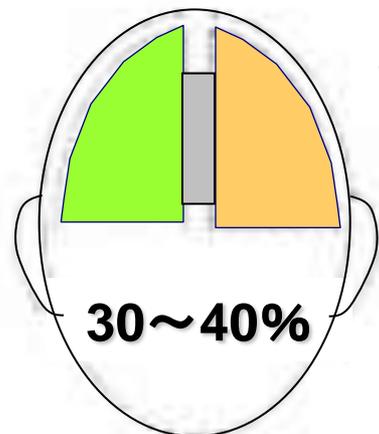
右利き



**右半球  
損傷**

**モノリンガル**  
(Albert & Obler, 1978)

**バイリンガル**  
(Nair & Virmani, 1973)



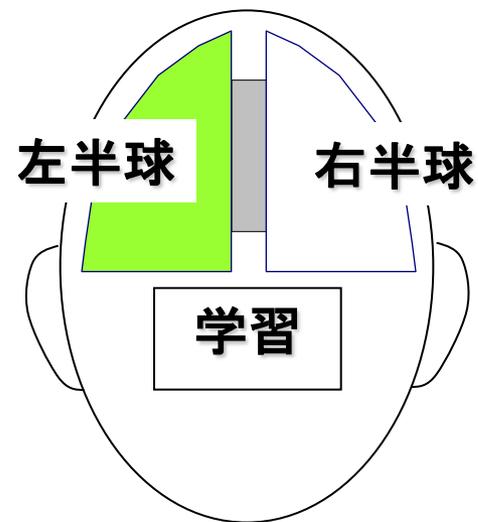
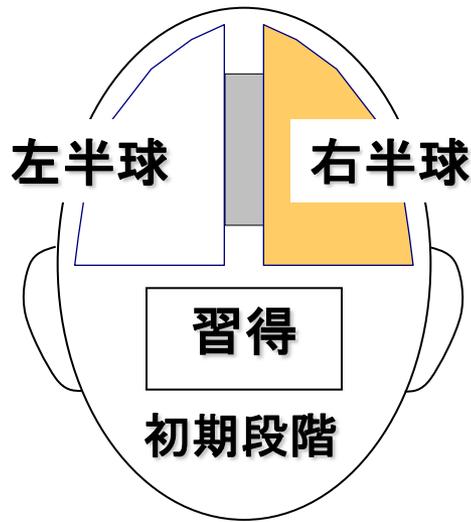
左利き



**モノリンガル**  
(Foss & Hakes, 1978)

**多重言語話者**  
(Gloning & Gloning, 1965/1983)

**モノリンガル／バイリンガルの右半球損傷と失語症発生率**



習得進行

第二言語の習得初期段階

言語能力のレベルと優位半球

習得(acquisition)から**学習(learning)**へ

(山本, 1996を改変)

# [論点3] 発音は「学習」できるか

1. **音韻規則**の習得にも「**敏感期**」が想定できる。

★「**言語聴覚**」(生後**12ヶ月頃**)

★「**音楽聴覚**」(音高聴覚)

(絶対音感～相対音感**11, 2歳頃**)

2. **11, 2歳頃**までは**音楽聴覚**の転用

3. その後も**自覚的訓練**によって達成できる。

# 小学校英語必修化の議論で 見落とされていること

## I-1. 幻想

英語漬け→“日本語能力が低下しない”？

## I-2. 危惧 週に1, 2時間で何ができる？

自宅学習や英会話塾を含めなければ、英語に  
ふれるのはせいぜい4日／365日 cf., 母語 = 3万時間(18週～)

## II. 小学校は母語の土台を固める

(a) 学校で与えるべき英語力 vs. (b) 優秀な国際人のもつべき英語力

(1) 中学～; 「型」(文法・読解・素読・暗誦)の訓練 ⇔ (a)

(2) 優秀な国際人育成 ⇔ (b) 高度な自主学習(研修制度や語学施設)

# 今 日本の**英語力**も低下している

## I. 英語力の低下

韓国・中国に比べて**最下位**という現実

## II. グローバル化時代に求められる英語力

★1に reading, 2に writing, 3に speaking

★中学(高校も!)での「英語教育」

⇔**会話中心**でいい?

学習段階と学習内容(**語彙力重視⇔量**)

**中途半端はとんでもない!**

# 外国語教育は技術教育

★裏づけのない漠然とした学習動機で始めれば  
ちょっとした困難で挫折→英語嫌い

「裾野効果」か「**排除効果**」か(鈴木孝夫,2006)

★韓国や中国の轍を踏むな！(渡邊寛治,2006)

97年に「**言語学習**」として導入、現在反省期  
「英語嫌い」と「塾通い」を生んでしまった！

ALTではなく韓国人が研修を受けて専科の教師に。

反復練習や単語の入れ替え練習中心→**飽きる！**

「言語の習得に目標を置いてしまうと、落ちこぼれ  
を生んでしまう」→塾へ行かせる:**悪循環！**

# 認知学習論の立場から見ると

## I. インプットの量と質⇔最適期

量: 母語のインプットは膨大+インターラクシオン

質: いつ・どんな必要から・どの部分についてか

★コストに見合う効果? ◆Hearing, 会話だけでは???

## II. 「言語教育」とは

「生涯をかけて磨いていかなばならぬもの」

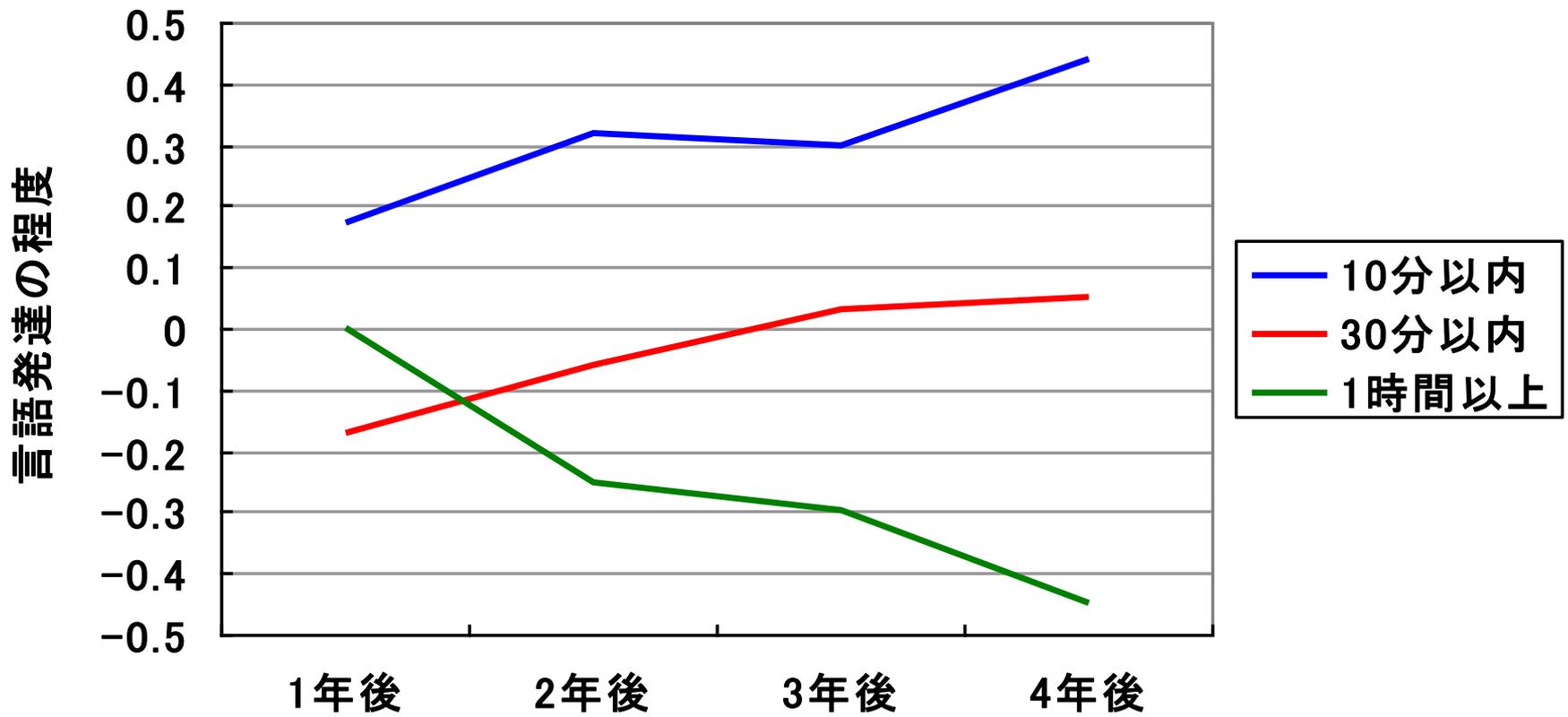
## ★中途半端な英語活動の導入

世界の人が耳を傾けるに足る内容をもつ人間を育てる

⇔日本語での表現力・論理能力

# ことばはやり取りを通して習得する

(Zimmerman, Christakis & Meltzoff, 2007)



# PISA学習到達度調査での日本の順位



# PISA型読解力⇔論証・論述力

**自らの目標を達成し  
自らの知識と可能性を発達させ  
効果的に社会に参加するために  
書かれたテキストを理解し、利用し、  
熟考する能力。**

**c.f., クリティカル・リーディング(ライティング)  
クリティカル・リスニング(スピーキング)  
⇔自分なりの判断や根拠に基づいて  
批評・評価しながら読み・書き・聴き・話す**

# 全国学力・学習状況調査

2007年・2008年4月 小中学生

○基礎的・基本的な学習内容は  
おおむね理解している。

△課題は・・・

自分で考え判断する力, 情報を的確に読み  
取り, 状況にあわせて活用する力の欠如



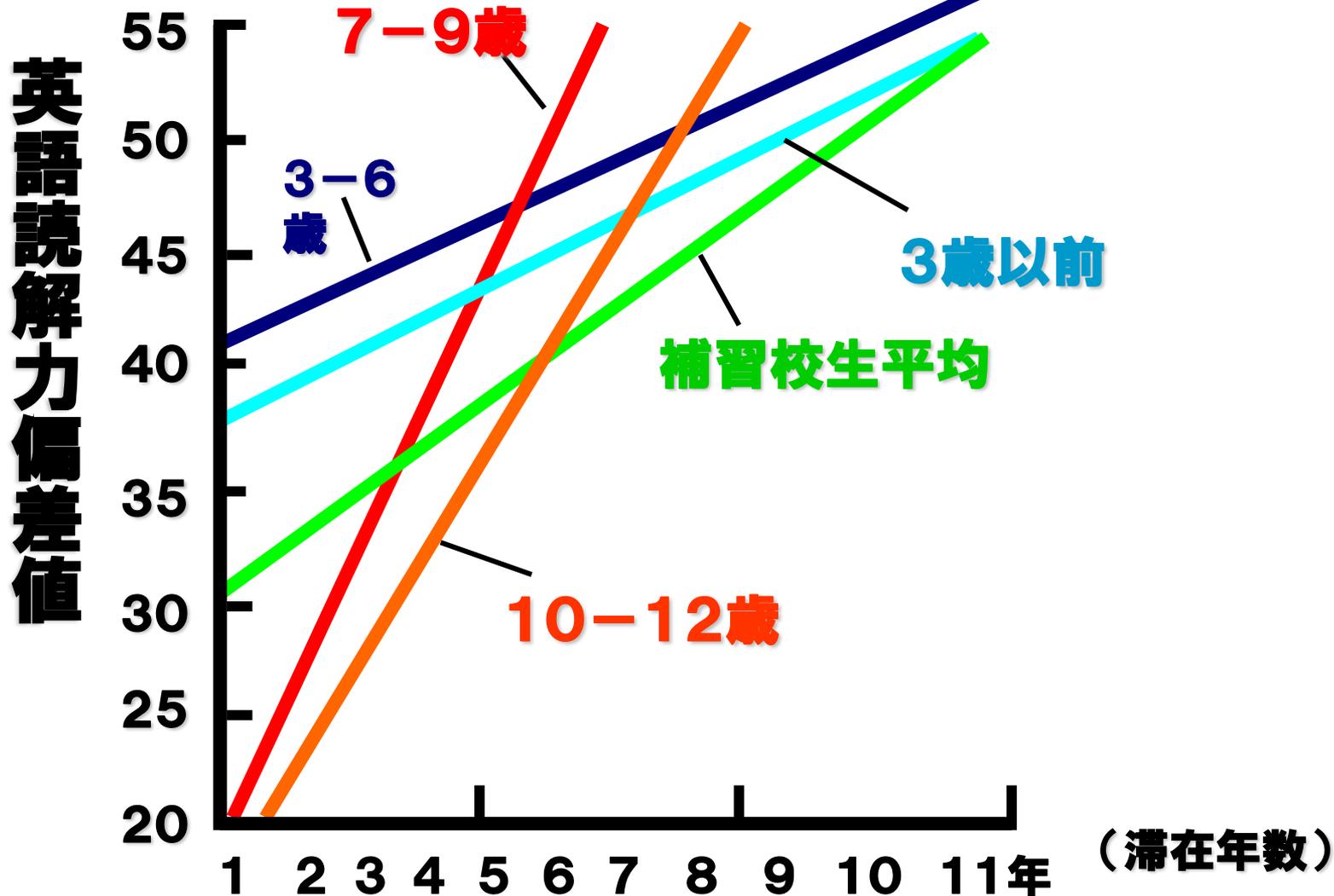
知識・技能を活用して, 思考し,  
表現する力に課題がある。

# [ 論点5 ]

# 入国時年齢と英語読解力

(Cummins & Nakajima, 1989)

## 学年平均に近づく度合



## **[論点7] 母語の土台がしっかりしていないと……**

**「言語活動に向かう姿勢1つをとっても、日本語で「他者と関わり伝え合い協働する」ことが苦手な生徒は、英語でも同様である場合が多い。語彙の習得における反復練習の習慣づけなども、英語以前に日本語で小さな成功経験を積み上げているかどうかは英語で同様の習慣づけに影響していると思えることがある。また、英語の主述関係や修飾被修飾関係で混乱する生徒がいるが、これも日本語における関係把握との相関もあるのかも知れない。そういった一種の仮説ともいえることを、連携研究のなかで探っていくことができれば、英語の学習指導の新たな指針が見えてくるだろう。」**

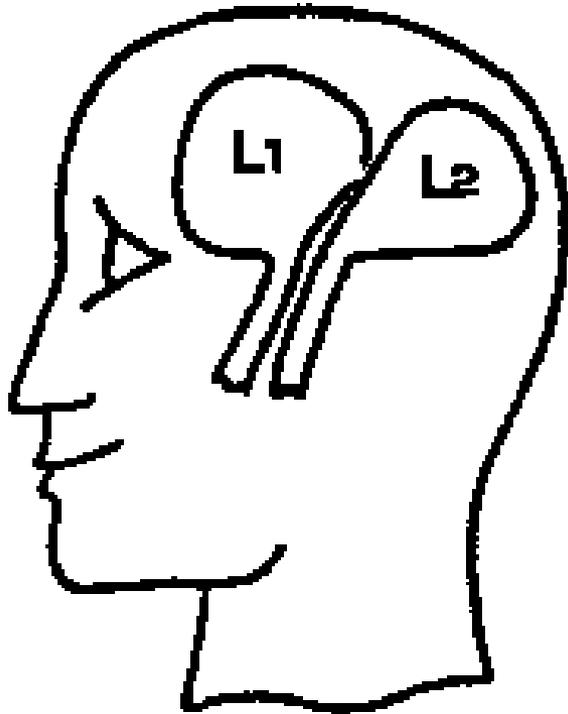
**（お茶の水女子大附属中学英語科，2006）**

# 英語既習者と未習者で差がない

## ■ 10年間の追跡結果(お茶大附属中)

1. テスト構成: 2割が聴解問題で8割が読解問題
2. 1年生の1学期末試験から
3. 既習者と未習者(13~20%)に差はない
4. 既習・未習にかかわらず、家庭での学習習慣がない生徒は成績が低下する。
5. 英語の成績と数学の成績の相関が高い  
(1年時の英語と国語の相関は高い)

# 「2言語バランス説」と「2言語共有説」



2言語バランス  
説

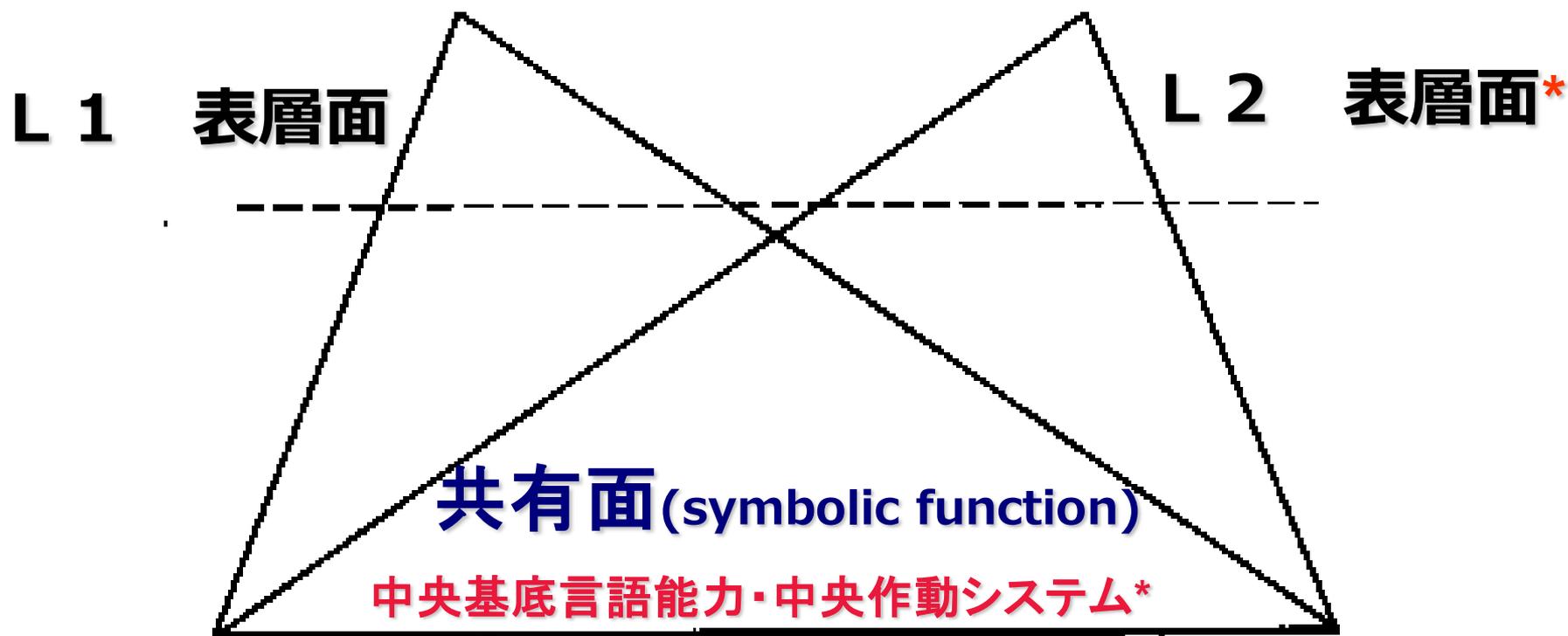


2言語共有説

Cummins, 1984より作成

# カミンズの「2言語共有説」(「氷山説」)

\* 音声構造, 文法構造,  
表記面は異なる.



\* 論理的に分析し,類推・比較し,まとめるといった抽象的思考力.  
+文章構造や文章の流れをつかむメタ言語能力は深層で共通.

(Cummins,1984 : p.143に基づき作成)

# 長期的視点に立つことばのカリキュラム

(1) 小学校では

**国語、算数、科学教育**に力を注ぐべき

(2) 中・高・大(+大人)という長期的視点に立ち  
学習者の**ニーズにあわせた英語教育**が  
**持続的に提供**できるシステムをつくる。

★ヒヤリング, 産出, 読解, 文法, 語彙, 作文,  
**言語の文化的背景と歴史**などを含む  
**総合的にバランスのとれたカリキュラム**

# 「私はバイリンガルになれなかった」



**ことばというものは背景に文化を持っています。**

**(中略)**

**幼児期に出会う文化と小学校で出会う文化とは  
違います。**

**思春期以降に出会う文化はさらに違ったものです。  
そのことが言語の最終的習熟度に何らかの影響  
を与えるのではないのでしょうか。**

**(T. Y. 心理4年 内田, 1999)**

# 「私はバイリンガルになれなかった」



私の小さな手遅れは、**注ぎ込まれる内容に見合う器の用意がいつも少しずつ遅れてしまった**ことにあります。**韻を踏む詩**などひとつも作れなかったし、**冠詞の性や格変化などはどのようにして身につけるか分からずじまい**、ギムナジウム（5年生～13年生）では**基礎のなさがひびいて、さまざまな文体やレトリックを学んでも、さっぱり使いこなせない**。そういった遅れを取り戻すには、やはりたくさんのことばに触れて、コツコツと基礎を固めていくよりないのだと思います。時間が足りなければ要所だけつまむか、裾野を省くかにならざるを得ないわけで、早期に言語環境に身を置くほど最終的習熟度が高いというのは、**言語を習得するというのは文化を受け継ぐこととほとんど同意義である**ことを反映してのことでもあるという気がするのです。

（K.Y.心理4年）

# 自己の内面を耕すことばの教育

このように第2言語をよりよく習得するというのは、どれだけその言語の文化に真剣に向き合うかで決まるように思います。また、現地の学校に長くいる子どもの方が、日本語補習校で作る文集の作文がうまい(文章力があり、内容がいい)という現象がありました。それは言語能力というものが、単に〇〇語の熟達ということだけでなく、文化を継承する努力によって自己の内面を耕すという、人間に共通な性質をもっていて、第2言語と格闘している子どもの方が、そういう能力が高いのだという気がしています。だからといって、日本で第2言語を早期に教えるべきだというのでは決してありません。そうではなく、日本でなされている日本語教育がいささか頼りないと思うのです。帰国後に受けた中学、高校の授業では、自分自身の変革を迫られたり中身をしばり出させられたりするような体験には不幸にして出会えませんでした。

# 小学校での**言語教育**

- 目的1    メタ言語意識の教育
- 目的2    言語に優劣なしの理解
- 目的3    言語表現法(大津);「言語論理教育」

★ **具体的な教材開発**

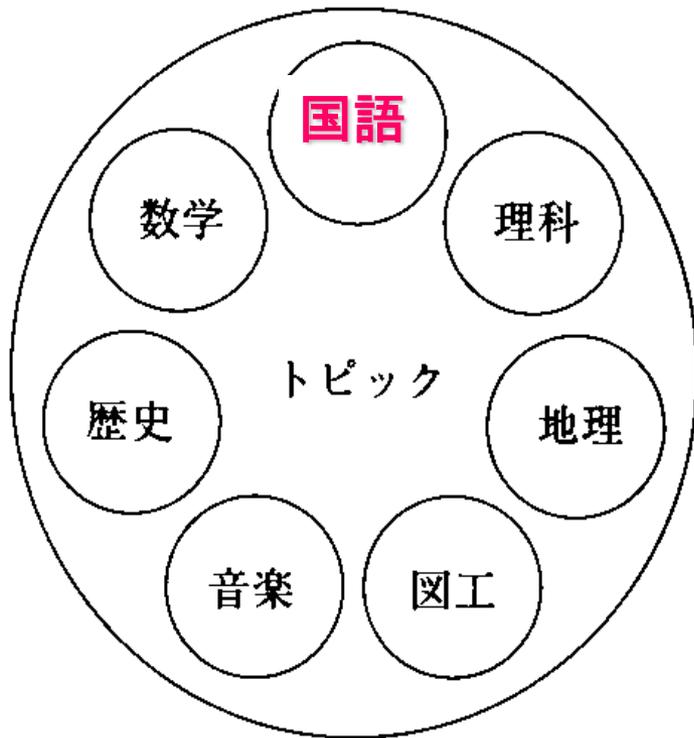
★ **教員養成プログラム開発**

**[言葉の力]を核に!**

*c.f., English across the curriculum*

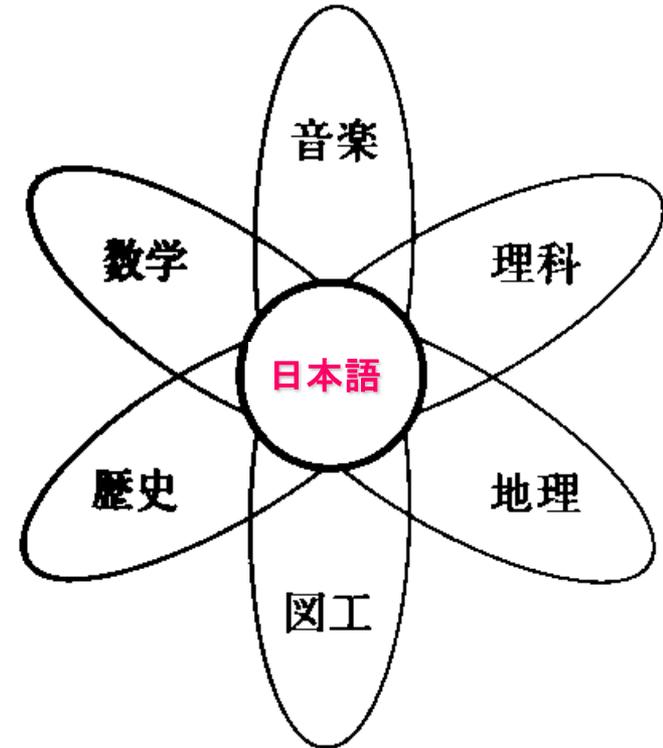
★ **教育の仕組みの保障**

# 全ての教科で日本語を重視 + 社会的構成主義



「総合学習」

Cross Curriculum



「全教科で日本語を重視」  
Japanese across the  
curriculum

(山本, 2003, p.208 を改変)

## 「言語力」を核に

「確かな学力をつけるための基礎」

⇔言語力；すべての教育活動の基本的な考え方＝「言葉は確かな学力を形成するための基盤。他者を理解し自分を表現し社会と対話するための手段で、知的活動や感性・情緒の基盤となる」＋交流；知の社会的構成主義

論理的思考の大切さ実現への道筋を描くことが必要！

★各教科にどう反映させるかが問題

# ことばの教育

—母語の**変質**を考慮に入れる—

I 軸：文脈や既有知識への依存度

II 軸：認知的処理資源の必要度

III 軸：**メタ言語能力**(読み書き能力の習得)

乳幼児期「一次的ことば(生活言語)」

児童前期「二次的ことば(読み書き能力)」

児童後期「三次的ことば(multi-literacy)」

(内田, 2004)

認知能力の必要度が低い

A

生活・遊び  
「一次的事ことば」

C

文脈依存度  
が低い

B

第IIIの軸メタ言語能力

Multi-literacy  
「三次的ことば」

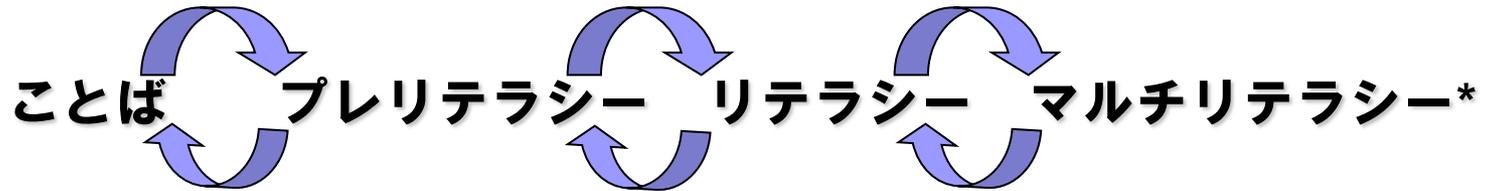
D

学習活動  
「二次的事ことば」  
Literacy

認知能力の必要度が高い

認知能力の必要度および文脈依存度から見た伝達  
(Cummins, 1984を改変; 内田, 2004)

発達段階 萌芽期 一次的事ことば期 二次的事ことば期 三次的事ことば期



ことばの機能\*\*

①考える手段

±

+

++

+++

②伝え合う手段

±

+

++

+++

文脈

依存

依存

独立

独立

コミュニケー  
ションスタイル

一対一

一対一

一対多

一対多

年齢

0～2,3歳

3歳～5,6歳

6～9,10歳

10～12歳

学齢

乳幼児初期

幼児期

小学校下学年

小学校上学年

ことばの発達と教育：一次的事ことば～三次的事ことばへ

\* 注)重層的に相互作用しながら発達する,

\*\* 注)①と②は相互作用しながら発達する.

内田(2004)

# 小学校での言語教育

1. 具体的な教材開発
2. 教員養成プログラム開発
3. 適時の見極め

言語教育全体を変える  
ために何ができるか？

# 「小学校での英語学習は必要か？」

1年生〔心理学基礎演習〕22名；4名反対へ

## I. 事前調査(英語活動導入への賛否と根拠) {16:6}

### 1週目；文献を論評・討論

①内田伸子(監著)・早津邑子(著)(2004)『異文化に暮らす子どもたち』金子書房.

②内田伸子(1999)「第二言語習得に及ぼす成熟的制約—英語学習の過程—」

桐谷滋(編)『ことばの獲得』ミネルヴァ書房.

## II. 事後調査 {14:8}

### 2週目；文献を論評・討論

③大津由起雄(編著)(2004)『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会.

## III. 事後調査 {12:10}

# 「小学校での英語学習は必要か？」

1年生〔心理学基礎演習〕22名；4名反対へ

賛否

1週目

2週目

①②＋討論

③＋討論

賛成

16

14

12

(根拠)

(0)

(11)

(12)

反対

6

8

10

(根拠)

(2)

(8)

(10)

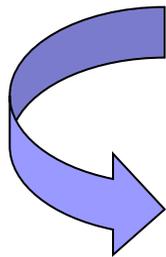
- ①内田伸子(監著)・早津邑子(著)(2004)『異文化に暮らす子どもたち』金子書房。  
②内田伸子(1999)「第二言語習得に及ぼす成熟的制約－英語学習の過程－」  
桐谷滋(編)『ことばの獲得』ミネルヴァ書房。  
③大津由起雄(編著)(2004)『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会。

# どうやったら素朴信念を変えられるか？

公立小学校で「国際理解教育」  
＝“英語を教える”というニュース

★“英語は幼いころから教えた方がよい”という  
素朴信念に文部科学省が**お墨付き**を与えた。  
→英語早期教育に抵抗がなくなっただけ。

(市川, 2004)



「ことばの**科学**」  
脳科学・認知学習論の知見を  
踏まえた検討と冷静な議論を！

# 小学校で英語を学習することの意義

1. 母語を知る⇔メタ言語意識

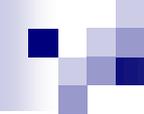
2. 他国の文化を知る

⇔母国の文化を知る

3. Open-mindedness

「地球市民意識」

⇔ 人類の共生→協生へ



---

*To be*

*continued.....*